



# インフラを守る技術で未来をつくる

## 新潟でME&道守シンポジウム

「技術者の学び直し」として地域のインフラを支える技術者の育成のための養成講座を修了したME（メンテナンス・エキスパート）および道守（みちもり）によるシンポジウムが5月16日と17日の2日間にわたり新潟市内で開催された。

中央自動車道笹子トンネルでの天井板落下事

### 5大学十1高専コンソーシアム

シンポジウムは、技術者の育成に取り組む岐阜大学、長崎大学、愛媛大学、山口大学、新潟大学、舞鶴工業高等専門学校で構成する人材育成連携コンソーシアムが主催。岐阜県、愛媛県、

故から10年が経過し、インフラの維持管理の重要性が注目されたものの、道路や鉄道、水道、電気は使えて当たり前という印象は変わっていない。さらに近年、自然災害が激甚化・頻発化し、インフラ施設の老朽化や人手不足が叫ばれる中で、これからの技術者としての在り方を考えた。

目指すべき方向性、そのための取り組みなどを検討した。

MEおよび道守は、インフラの点検や維持管理手法に関する専門的な講習を受講し、知識と



全国からインフラ技術者が集った

## 5年後の姿考える

### ME&道守ワークショップ

#### インフラを守る技術者に深化

地域住民の安全・安心のためのME、道守の養成講座修了生らによるワークショップも開かれ、「インフラの安全・安心をサポートできる技術者集団」への深化を目指して、5年後のM

技術力が問われる修了試験に合格することで認定される。各地区でインフラの町医者として地域に根差した活動を行う。インフラの点検維持管理に関する技術者の養成講座は、産官学が連携し、全国で広がりを見せており、5地区での修了生は1940人となる。



満員となった会場

維持管理を行うことを考える時代」として、デジタルデータの取得だけでなく、取得したデータを正しく分析、評価し、次に生かせる人材育成プログラムの展開を見据える。また、国土交通省による教育プログラムの下支えを働き掛ける考え。

また、特別講演では、北海道大学の長井宏平教授が「SIPの目指す土木業界とは」と題

し、内閣府の戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）で取り組むデジタル技術を活用したインフラ維持管理技術の効率化や人材育成プログラムの研究について解説。長井教授は、オープンなデータを自由に使って

「ふくしま発地域のインフラはみんなで守る」と題し、福島県平田村で地域を巻き込んで取り組んだコンクリート舗装工事による道路づくりや橋梁塗装の事例を紹介。「単に発注者、受注者だけでなく、最後は住民の愛着が必要であり、そのコメントを起すのが、地域建設業である」と話した。

E、道守のゴール「MMGs（ME & Michimori Goals）」を話し合った。修了生ワークショップは、シンポジウムに合わせて開催しており、毎回、ME、道守があるべき姿を考えて続けている。今回のワークショップでは、各地区のME、道守を深化させる要素として▽技術研さん▽協働▽地域貢献▽活動意欲▽広報の5つのテーマで議論が交わ



検討結果をまとめる

供（CPDS）の付与、資格へのインセンティブなどのほか、ME同士の情報共有、資格の認知度向上へSNSやメディアを活用したPR活動の展開など、さまざまなアイデアを出し合った。今回、検討、発表した5年後の目標や取り組み、指標などについては、各地区に持ち帰り、来年のワークショップで取りまとめで発表する予定。さらに、1年後にアップデートしながら5年間繰り返して、目標達成を目指す。

## 地域の技術者集団を育成 効果的インフラマネジメントに

人材育成連携コンソーシアムの成り立ちは、2008年に岐阜大学と長崎大学で技術者を育成するイベントを始めました。発注者と受注者の技術レベルが伴わないと、技術レベルの低い方に合わせたものが出来てしまう。低いものしか出来ない場合、せっかく最新の技術、知識があっても、低いレベルでしか出来上がらない。あるいはメンテナンスも続かない。同

岐阜大学 沢田和秀 教授



じ土壌で、同じ技術の話ができる人たちがたくさん集まった。技術のスパイラルアップができて、さらに良いものが出来る、というのが技術者育成の発端です。

大切なのは、技術力が上がった喜びを感じる、あるいは分からないことを分らないと言えらる場所があるということ。分からないと言えらると、もっと成長しなければいけない自分が見えるようになってきます。そんな時に、このコンソーシアムのように自分の分からないことを知っている人がいたら学びのモチベーションになる。これから人が減っていく中で、少

し考えなければいけない時期にきています。技術とは、科学的知識を実用的な目的のために応用すること。応用することがとても大事で、土木は、相手が自然なので基本のままでは、対応できない。知識を利用して、作業をより簡単に、より早く、より効率化するというのが一番重要で、それが、いわゆる生産性の向上ということなんです。

地域のインフラを守るには、インフラを効率的に施工し、効果的に維持管理する。これには技術力が必要です。それから地域のこと分かっている必要があると思っています。効果的かつ効果的なマネジメントをするには、地域特有のインフラの現状に正しい初期診断ができるインフラ技術者が各地域にいたらない。その一端を担うのが、このコンソーシアムや各地域の産官学連携組織だと思います。時代は進み、技術知識の応用や、やり方も変わっていくので、それに追いつくため、さまざま

はちゃんものが分かっている必要がある。分からなければ、分かる仲間聞く、そういう形がここにあると信じたいです。ワークショップについて、ME新潟の会の荒木会長は、「さらに自分が価値ある存在、社会に役立つようになるため、みんな同じ方向を向いて5年後の目標をつくらう」ということに「落ち着いた」とする。また、「他県の人と交流することによって、さまざまな知見を広げることが出来る。何より同じ思いを持った全国の同志とつながるといことに価値がある。毎回、全国の仲間と会える楽しみもある」と語る。